

封神演義 (中)

安能
務
訳



講談社
文庫
講談

ほうしん えん き
封神演義 (中)

あ の う つ と り
安能 務 訳

© Tsutomu Anō 1988

1988年12月15日第1刷発行

1997年2月14日第26刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

ISBN4-06-184321-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

封神演義 (中)

安能 務 訳

目次

第三〇回	周紀が武成王の造反をそそのかす	九
第三一回	聞太師、兵を駆して追跡す	二四
第三二回	黄天化が潼関で父に会う	三七
第三三回	黄飛虎が汜水関で擒われる	四〇
第三四回	黄飛虎が西岐に帰投する	六三
第三五回	晁田、兵を率いて西岐を探る	七三
第三六回	張桂芳、詔を奉じて西岐を討つ	八三
第三七回	姜子牙が崑崙に上る	九五
第三八回	四聖が西岐に子牙と会す	一〇六
第三九回	姜子牙が岐山を氷で閉ざす	一二〇
第四〇回	魔家四将、黄天化の手に死す	一三三

第四一回 太師聞仲、征西の途につく

一四七

第四二回 黄花山の四天王が征西に従う

一六一

第四三回 聞太師が西岐で苦戦する

一七三

第四四回 姜子牙の魂魄が崑崙に彷徨う

一八六

第四五回 燃燈道人が十絶陣破りを議す

二〇三

第四六回 広成子が金光陣を破る

二一八

第四七回 趙公明が聞仲を輔けて戦う

二三三

第四八回 陸圧、計を設けて公明を射る

二四六

第四九回 武王が紅沙陣に陥閉される

二六五

第五〇回 三仙姑、九曲黄河陣を擺く

二七六

第五一回 子牙、野営を襲って聞仲を破る

二九一

第五二回 ああ、聞仲絶竜嶺に死す！

三〇五

第五三回 鄧九公、勅を奉じて西を征つ

三七

第五四回 土行孫、大いに武功を輝かす

三三七

第五五回 土行孫が西岐に帰伏する

三五五

第五六回 子牙、計を設けて九公を降す

三七五

第五七回 冀州侯蘇護が西岐を伐つ

三九〇

第五八回 子牙、西岐に呂岳を邀え撃つ

四〇五

第五九回 殷洪、下山して四将を収める

四二四

第六〇回 馬元、下山して殷洪を援ける

四四三

第六一回 殷洪が太極図で命を落とす

四六〇

第六二回 張山と李錦が西岐を伐つ

四七六

封^{ほう}

神^{しん}

演^{えん}

義^ぎ

(中)

第三〇回 周紀が武成王の造反をそそのかす

紂王^{ちゆうおう}二十一年の元旦。

妲妃^{だつき}（妲己）が武成王^{ぶせいおう}黄飛虎^{こうひこ}に報復しよう^{だつき}と待ちかまえていた日が、ついに訪れた。

——一族の毛皮を剥いで袍襖^{ほうあく}（上衣）を作らせたのは比干^{ひかん}である。しかし軒轅^{けんえん}古墳の巢窟^{さうくつ}に火をかけたのは黄飛虎であつた。つまり黄飛虎は比干よりも、さらに憎むべき仇である。

比干に対しては、すでにその心臓^{しんざう}を抉り出したことで、首尾よく仇を討った。こんどは黄飛虎にどう報復するか、と妲妃はいろいろ考えをめぐらせる。

最初に考へついたことは、いっぺんには殺さず、手足を一本ずつ斬り落とすことであつた。しかしそれは技術的にむずかしく、比干に使つたのと同じ手口では成功すまい、と妹の喜媚^{きび}に反対される。

手足を斬り落とされるとなれば、たとえ紂王の命令であろうと黄飛虎は開き直るに相違ない。

そうなればことは面倒である。まず殿中に黄飛虎を取り押さえることの出来る者はなく、かりに紂王が自ら手を出したところで、勝負の程はわからない。いや、警護の武士が黄飛虎に味方することさえありうるだろう、と喜媚は反対したのである。言われてみればなるほど、と姫妃は断念した。

そうなれば残る途は、自分が直接に手を下して黄飛虎を暗殺するしかない、と姫妃は考える。そしてついに意を決した姫妃は、ある暗い夜、「原形（千年の狐狸精）」を顕わして、武成王府に忍びこんだ。が、五色の神牛に猛然と吼え立てられ、神鷹しんようにけたたましく鳴き騒がれて、失敗する。

しかし、それでもなお姫妃は諦めなかった。黄飛虎は時どき夜半に起き出して、城の警備状況を視察することがある。姫妃はその機会を狙った。

が、その試みも徒労におわる。姫妃が武成王府に忍びこんだ夜から、黄飛虎はつねに神鷹を、神牛の角に止まらせて出歩くようになった。つまり最初に試みた暗殺の失敗で、姫妃は次のチャンスをも潰していたのである。神牛と、そして神鷹に護られた黄飛虎を、首尾よく襲うことは、いかな千年の牝狐といえども容易なことではない。

それで姫妃は全面的に計画を練り直した。そして、ひたすらに元旦の到来を待ちかまえていたのである――

そんなこととは露知らず、いや、それとは無関係に、黄飛虎夫人の賈氏こしもまた、指折り数えながら元旦の訪れを待ちわびていた。賈氏は朝歌一ちやうかの美人――と評判が高い。しかし現実に彼女の

顔を見た者は数少なかった。それもその筈、賈氏は年に一度だけ、元旦の朝に武成王府を出るほかは、出歩いたことがなかったからである。

それは、後宮の正宮（皇后）へ年賀に赴くためであつた。しかし賈氏が毎年の元旦を心待ちしたのは、年賀のゆえではない。西宮の黄貴妃こうきひは黄飛虎の妹だから、当然に彼女の義妹であるが、二人は殊の外に仲がよかった。だから正宮への年賀の機会に西宮へ立ち寄り、そこで年に一度の語らいが出来ることを、彼女は何よりの楽しみにしていたのである。

そして賈氏の待ちかねていた元旦が、ついに訪れた。その朝早く賈氏は、いそいそと武成王府を出て後宮に赴く。姜貴妃きやうきひが無残な死を遂げた後の正宮には、姉妃が主あるじとして納まっていた。しかし正宮には納まったものの、それは紂王の一存によることで、外朝の承認を受けていなかったから、姉妃は正式な皇后ではない。

だから、姜貴妃の時代には、正宮で皇后と並んで年賀を受けていた西宮の黄貴妃は、絶えて正宮には顔を出さなくなった。黄貴妃はそうすることで、ケジメをつけたつもりである。しかし姉妃は別段それを気にかける様子もなかった。どうやら女狐は好色この上ないが、権力にはあまり関心はないようである。

それより姉妃は、儀式には全く興味がなく、いや、苦手でさえあつた。だから、ずばらで年賀を怠ったり、あるいは、作法の上で手抜きされても、目くじら立てることはない。その代わり、年賀に参内した者に、ことさら声をかけることもなかった。

だが、この日姉妃は、親愛の情を露わに賈氏を迎えている。しかもやさしく口をきいた。

「お互いにまた一つ年を重ねましたね。夫人は青春幾何に？」

「臣妾は虚しく歳をすごすこと四十九でございます」

「では、わたくしとは八つ上の姐々ですね。かねがね「お姉さま」とお呼び出来るように、姉妹の義理を誓いあいたいと考えておりました」

「ありがたき幸わせに存じますが、娘々は万乗の尊きにあらせられ、臣妾は一介の婦人。しがない鶏が美しい鳳と義縁を結ぶことはできません」

「それはとんだご謙遜を。わたくしも元はと言えば田舎の蘇州侯の娘で、あなたは武成王夫人。ましてや西宮の黄貴妃はご義妹ですから、わたくしたちはいわば親戚同士。身分に、いくばくの隔りがありましようか。さっそくに「結拜」の盃をかわしたいと思ひます。一緒に摘星楼に参りましよう」

と姐妃は立ち上がった。

「いえ本日は元旦でございます。大勢の人たちのお年賀を受けられる娘々を邪魔立てすることは赦されません。臣妾はこれにて失礼いたします」

と賈氏はきっぱり辞退する。

「その儀は心配に及ばない。参賀者には、記帳してもらえばすむことです」

と姐妃は、立ち去ろうとする賈氏の腕を抱えた。そして有無を言わさず摘星楼に連れこむ。とんでもないことをする、と賈氏は腹を立てたが、気が転倒してなす術を知らない。いやかりにいきなり突きとばしてみたところで、おそらく姐妃はがっちりと抱えた腕を決して放すまい、と賈

氏はあきらめた。

摘星楼では、すでに結拜の宴が用意されている。スツポンの血を落とした酒の入った盃が卓テーブルの中央に置かれていた。計画的である。

「姉妹を誓って一緒に飲みましょう」

と姉妃は、賈氏の腕を抱えたまま、片手で盃をあげると、一気に半分ほど飲んだ。そのまま盃を賈氏の唇に押しつける。もはや拒むことは許されない、と賈氏は観念した。目をつむって一気に飲み干すほかない。

そして、結拜を祝福する宴が始まる。賈氏はいくども辞して去ろうとした。しかし姉妃は執拗にからんで放さない。そこへ、外朝で年賀を受けていた紂王が、摘星楼に戻ってきた。

ワナにかかった——と賈氏は顔面蒼白となる。あわてて欄干の蔭にかくれた。

「ほお、誰と飲んでいたのじゃな？」

と宴席に目をとめた紂王が聞く。

「武成王夫人賈氏でございます」

「へえ!？」

紂王は驚いた。ありうべからざることである。

「お会いになれますか？」

と姉妃がシナをつくった。

「とんでもない。君は臣妻くみに見えずまみ。それが礼というものだ」

と紂王はきっぱり拒否する。

「その通りでございます。しかしわたくしは、いまさき賈氏と姉妹を誓いました。それに陛下と武成王は君臣でありながら、同時に内戚でございます。礼の禁は、この場合には当てはまりません。それより陛下、噂どおりに賈氏は、天姿国色、まことに妖嬈ようじやう（美しくなまめかしい）でございます」

と姫妃は結びの言葉に力をこめた。そしてニヤリ笑う。美人と聞いて、どの程度に？ と紂王は興をそられた。それと見抜いて姫妃が、隠れていた賈氏に声をかける。しかし賈氏は返事もせず、身じろぎもしなかった。が姫妃は賈氏を引きずるようにして紂王の前に連れ出す。

「ほお！」

と紂王は、その紛まきうかたない美しさに、思わず嘆声を漏らした。賈氏は急いで平伏する。
「お姉さま。わたくしたちは親戚で、これはいわば内輪の出会い。そうかしこまらずとも、どうぞお立ちになられて、席にお着き下さい」

と姫妃が賈氏に着席をうながす。

「その通りだ」

と紂王も声をかけた。しかし賈氏は床にへばりついて顔を上げようとしない。

「きょうは元旦だ。武成王府も忙しかろう。退きがるがよい」

と紂王は考え直して言った。

「陛下、いきなり帰したのでは、それこそ礼に反します」

と姫妃が慌てて引き留める。

「では、朕は席をはずす。二人で飲み直すがよい」

と紂王は立ち上がった。

「陛下が姉上を起こして上げなければ、姉上は席に着こうとはしません」

と姫妃が紂王の袖を引く。紂王が賈氏に歩み寄って、その肩に手をかけた。賈氏は平伏したままあかずさって、さっと立ち上がる。急いで欄干に駆け寄った。身を震わせて声を張り上げる。

「皆の者、よく聞きたもれ。賤人（あばずれ女）がわたくしをワナにかけ、昏君（フンチユン）（バカ皇帝）が臣妻の肩に手をかけた。武成王夫人は武成王に節を立てて死んだと、お伝え下されよ」

と身をひるがえして欄干から跳び降りた。

悲報を最初に受けたのは、もとより西宮の黄貴妃である。彼女は西宮で、首を長くして兄嫂（あによめ）の来訪を待っていた。遅い、と様子を探りに出した侍女の口から、黄貴妃は賈氏が摘星楼に昇ったと報らされている。なぜあんなところへ、と黄貴妃はハラハラしながら、それにしても、時間が長すぎるとイライラしていた。そこへ悲報がもたらされたのである。

「やはり、あの賤人の陰謀にかかったのか！」

と逆上した黄貴妃は、輦（くるま）にも乗らず侍女も連れずに、一人で摘星楼にかけつけた。やはり、血の飛び散った兄嫂の無残な死体がそこにある。

黄貴妃は、こみあがる嗚咽（おえん）を抑えながら、案内も請わずに、ばたばたと音を立てて階段を駆け上がった。黄貴妃の凄まじい形相に、紂王は一瞬目を伏せる。かたわらに姫妃がなにごとともなか